

特集

創刊120周年記念

# 『幼児の教育』120年。 未来に何をつなぐのか 3

1901(明治34)年、『幼児の教育』は『婦人と子ども』という誌名で産声を上げました。

以来120年、本誌は変わりゆく日本の幼児教育・保育を見つめてきました。

この120年の間に、子どもも変わったのでしょうか。

あるいは、子どもは子ども、いつも変わらずにそこにいるのでしょうか。

今年は、「120年の大人と子どもの関係」を本誌の歴史と共に振り返っていきます。

今回のテーマ：

## 子どもの暮らしと行事 — 祭りに着目して

辞書によれば、行事とは「慣例的に日を定めて行う催し物のこと」。保育の中での行事については、「決められているから、恒例だからやる」でよいのか、普段の暮らしの彩りや活力になっているのか、かえって圧迫しているのではないかと、大人の思惑と子ども自身の参画との間で多くの保育者が悩むテーマかもしれません。今回、“行事”的に保育の中で取り組まれることもある「お祭り」をキーワードに語りあっていただきました。小さな迷いや悩みが吹き飛ぶような生き生きとしたお話、どうぞお読みください。



アーカイブズ

「『小鳥の死』または『園行事』のこと」 間藤 侑  
— 『幼児の教育』第82巻第11号(1983年)から —

## 座談会 2021

### 子どもの暮らしと行事 ― 祭りに着目して

松延 毅  
西野 博之  
加藤 理  
(発言順)  
菊地 知子  
(司会)

**菊地** 本誌創刊120周年の記念の座談会の第3弾です。初めに、ご登壇いただく方の自己紹介をお願いしたいと思います。

**松延** 新潟県の出雲崎町という日本海沿いの小さな港町にある出雲崎こども園で、昨年度から園長を務めています。子どもたちの文化や、子どもたちが育つ地域に根づいているものについてここ数年とても関心をもっているので、ご一緒に考えていけたらと思います。

「道を歩く」ということにも絡めて、考えてみたいと思います。よろしくお願いします。

**西野** 元々、何らかの理由で学校に行きづらくなった不登校と呼ばれる子どもたちの居場所づくりに35年前からかかわってきました。神奈川県川崎市で子どもの権利条例をつくるときの、調査研究委員会の世話人の一人として条例の策定にかかわった後、条例の制定記念ということで、「川崎市子ども夢パーク」という場所をつくりました。2003年にオープンしたので、18年たちます。その指定管理者として運営を任されています。今日は、夢パークにおける子どもたちの行事、お祭りに絞って皆さんとお話できればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

**加藤** 文教大学の教員をしています。専門は教育学ですが、ルソーとかペスタロッチというような教育思想家の研究ではなく、もっと子どもの姿をより深く知ることができるよう

松延 毅（出雲崎こども園園長）  
加藤 理（文教大学教育学部教授）

西野 博之（川崎市子ども夢パーク総合アドバイザー）  
菊地 知子（お茶の水女子大学附属いずみナーサリー主任保育士）

な研究はないのか、と思いながらたどり着いたのが、「児童文化」です。子どもに与える文化、子どもたちがつくり出す文化などを探りながら、子どもという存在や、大人と子どもの関係について考えていく研究です。大学院の頃は、古い時代の年中行事とか生育儀礼について調べていたので、今回のお話は、私も非常に興味をもっています。よろしくお願いいたします。

## 出雲崎大祭と遊び

**松延** 出雲崎という町を簡単に紹介します。新潟県のちようどおへそぐらいに位置し、私の町は海に面しています。ここ十数年でできた新しい道と、元々江戸時代ぐらいからある道があり、そこに挟まれるように細長い街並み、「妻入り」という構造の街並みが、ギュギュギュッと入っている町になっています。町の歴史は長く、佐渡島から出る金銀の荷揚げ

の場所になっていたこととか、松尾芭蕉が俳句を詠んだ地であったりとか。良寛さんという和尚が生まれた地でもあるので、歴史的に活躍された方の面影が地域に残っている場所です。同時に、今の子どもたちのお父さんお母さんが子どもだった時代の名残もある町でもあります。

今日お話しするお神輿<sup>みこし</sup>にしても、お正月の獅子舞の練り歩きにしても、地域の人たちは必ずこの昔からの道を往来する。新しい道でもなくほかの道でもなく、この道を行き来するということがあります。なぜ道を歩くのか、出雲崎という町に住む人たちにとって、家の目の前に伸びている道にはどういう意味があるのか。「道を歩くこと」が根づく伝統の行事、そこに子どもが育っていることについて、園



▲松延 毅氏

の実践を含めて考えたいと思っています。

出雲崎大祭についても簡単に紹介します。


元禄3年に始まったお祭りで、6月17日、必ず決まった日に行い、海岸の全地区を神輿が練り歩きます。練り歩くのは前祭の意味合いをもっていて、翌日に石井神社の境内で神楽舞などを行うのが本祭といわれているものです。前祭、本祭をひっくるめて大祭と呼んでいます。

出雲崎の子どもたちは、幼児期までは、お母さんやお父さんにくっついて、神輿の前後にリヤカーに括られたもの——山車<sup>だし</sup>と呼ばないんですけれども、その隙間に乗せ込んでもらって一緒に歩くことを楽しむ。小中学生になると、子ども神輿を背負ったり、お囃子<sup>はし</sup>など大人神輿の前後を挟んでいくところに参加したりしています。

園ではお祭りの時期になると、やはり遊びの中で、自分たちもやってみたいと思って、

年長児たちがたいい神輿を作ります。神輿と合わせて、太鼓とかお囃子の歌を自分たちで作ったり、小さい学年の子たちにこうやるんだよと教え込むことがあったり。一昨年の年長は、本物と同じような神輿を作りたいんだと、とても神輿にこだわっていました。お神輿の棒の組み方や装飾など、どうなっているかをお父さんに聞いたりして、本物らしく作っていくことを楽しんでいました。年度によって内容とか方向性とか子ども興味、関心の向き様は違うんですけれども、子どもたちの探究活動が地域の文化伝統の行事によって毎年もたらされていると言えると思います。

ちなみに僕自身は、出身は出雲崎ではなく茨城県で、全然違う所から来たので、子どもたちがそういう地にどういうふう<sup>う</sup>に育っているのかな、どう感じ取っているのかなと。自分がその地で育ったわけではないからこそ関心が向いた、ということも実はあります。



神輿を作ると、担いで出たくなる。そして、園舎の中を歩く。たくさんの人に見てもらおう。決して保育者たちが提案するでもなく、作っただけというところが子どもたちの中で当たり前になっている。そして、ぐるぐるぐるぐると歩き回っていく。子どもたちの遊びのとても自然な姿のひとつとして見られています。

実は去年の子たちは、園の中を歩き回った後、町に出たいと言いだしたんです。町道を歩きたくなっただけです。それができたらとても面白くなるなと思っていたんですけれども、新型コロナウイルス感染症の影響があっても断念せざるを得ませんでした。園の中を歩いていた子どもたちがだんだん、その先に広がっている道に関心をもつと言いました。どうか、実際に大人が歩いている道に出たいという気分にもなっていく。

祭りでは、道を大人たちが神輿を担いでいく中で、各神社の前に来ると、「あおり」とい

うんですが、「やりやーやりやー」という掛け声を出し、神輿がシャンシャンと音を出して、ものすごく活気づきます。これらも自分たちのお祭りのひとつの様として、遊びの中で取り入れられていたりしています。

最近、私自身の関心事として、出雲崎という場所で育つ子どもたちにとって、その地域がどういう意味をもっているのか、あるいはそこにある歴史とか文化とか匂いも含めて、そういうものは子どもたちにとってどんなものだろうか、と考えています。その地で生まれ育った子にとっては自然過ぎて、あまり意識もしないのではないかと、実は思っているんです。神輿をおおる様子とか、神輿に付いている装飾のこと、太鼓が一緒について歩くことなどを、感覚として、自分たちの知っていることとして遊びに取り入れるんですねけれども、それが、その地域の歴史の中にあることだとは感じていないのではないかな

と思います。ただ、その子たちが大きくなつて、出雲崎ではない場所で生活し、その地域の伝統的な文化に触れたときに、自分たちが育つていた地域の文化との違いに出会つて、「あれ、僕たちが住んでいた出雲崎と違うぞ。出雲崎にはそういうふうなものがあつたんだ。こちらの地域にはこういうものがあるんだ」と、あらためて出雲崎の地域の良さだったり、自分たちの育つた文化や歴史に気持ちに向くのかなというようにも感じています。


それから、もし、出雲崎の祭りがどこかに拠点をもつて、練り歩かない祭りであれば、子どもたちは廊下に出るのだろうか、出ないんじゃないかなとも考えます。海沿いの道が、子どもたちも含めた人々の生活に寄り添っている道路ゆえに、歴史とか文化とかに自然に根づいていく、その象徴的なものなのだろうなと思っていました。出雲崎の、道という場を使って執り行われる行事というのは、子ども

もたちの原体験のひとつの要素になつていて、自然に、遊びとか探究の活動ににじみ出る。それによつて、探究的な芽が育まれて学びを得ていくのではないかな、と感じています。子どもたちの生活と、暮らしの中の文化と行事。つながっているのだろうと。

## 子ども時代と原風景

**加藤** 児童文学作家で『おしいれのぼうけん』などの作品で知られる古田足日さんが、「原風景」ということを強くおっしゃっているんです。原風景というものが人間の成長にとって、とても大事なことだと。古田さんが自分の原風景として挙げていることは、春の暖かい日に、お母さんが洗濯をしているそばで小学校就学前の古田さんがレンゲの花束を持つて遊んでいる。その記憶が古田さんの原風景で、とても記憶が強いものだとおっしゃっています。

原風景というのは、自分に何かあつたとき



にふとその記憶がよみがえって、その記憶の中に浸っていると涙が流れてきたりして、時間がたつのを忘れるようにぼうつとしていて、ふと気がつくともた現実に戻って生き返ったような気持ちになる。そうやって、何かあると立ち戻り、またそこから始まる場所になるんですね。

松延先生のお話の地域のお祭りで考えると、笛や太鼓の音とか、匂いとか、風の様子、季節の感じとか、いろんなものがミックスされて記憶に取り込まれていく、それが、その地域に育つ子どもにとっては、原風景になっているのではないか。何かあったときに、ふとお祭りの笛の音とかがよみがえってきて。記憶の中に浸っていると時間がたつのを忘れて、ふと現実に戻って、また心や体がよみがえっていくということがあるのでは、と思うんですね。松延先生のお話は、地域の伝統文化が子どものアイデンティティーの形成に非常に

強い意味をもっていると感じさせてくれるものだったと思います。

それから、道ということでは、大人にとつての道と子どもにとつての道は、違うところもあるのではという気がするんですね。例えば、大人にとつては当たり前道だと思う道が道なんでしょうけれど、子どもにとつては、大人にはとても道と思えない所を道といって喜んで歩きますね。「子ども道」とか「猫道」といわれる所ですけれども。そういう所を歩いているときの子どもって、何を面白がっているのか。なぜそれを楽しむのか。大人からは道と思えず、大人が構築した世界の中では非正規の道であり、子どもの世界、つまり大人の世界とは異なる「子どもの領分」の中の自分たちだけの道だと思うから、子どもにとつては魅力なのだろうと思うのです。

そして子どもは、大人にとつて道と思えない非正規な道を歩くことで、非日常的な空想



▲加藤 理氏

なというのが、  
気になったところ  
です。教えて  
いただきましたな  
と思いました。  
そもそも、道を  
歩くというのは、


の中を楽しんでいると思うんですね。だから、  
道を歩きながら、例えば子ども道といわれる  
道を歩いているときは、自分がそこで探検家  
になったつもりで歩いていたりして。干から  
びたミミズとか、ブロック塀を這っているカ  
タツムリとかを見つけないで、空想世界をわ  
ーっと広げながら歩いていると思うんですね。

そういう意味での道を歩く子どもたちの様  
子と、今のお祭りの道を歩く子どもたちと、  
どう関係するのかなと考えながらお話を伺っ  
ていました。お祭りの道を歩いている子ども  
たちはどういう楽しさの中で歩いているのか

なぜ出雲崎の人は道を歩くのか、を聞いてみ  
たいなとも思いました。

**松延** お祭りとして道を歩くことについて、  
詳しいことは勉強しきれていないんですけども、  
さまざまな行事、例えばお正月の獅子  
舞も海沿いの端から端の地区をすべて歩いて  
いく。お神輿も町の外れから反対側まですべ  
て歩く。出雲崎はすごく小さな町なんですけ  
れども、江戸時代には3万人が住んでいて、  
日本一人口密度が高い地域だったといわれて  
いたそうで、それだけ活気があったときに、  
その道をくまなく往来することそのものが何  
かシンボリックな行いだっただのではないかと。  
あくまで推測ですが。それが今も形は変わら  
ずに、残ってきているのではないか。  
それから、道ではない道を歩く子どもたち、  
今回で言えば神輿を背負って歩く子どもたち  
は何か面白いのかなと考えると、そもそもの  
遊びとして、自分たちが作ったものを持ち出





して遊ぶということが、神輿に限らず園の中でいろいろ見られますので。作ったものを持って歩き出すこと自体が楽しい、ということがあるとも思います。それから、いつもは大人たちの様を見ている側から自分たちが背負う側になって、自分たちの姿を見てもらいたい、という思いもあって練り歩くのではないかなというのが僕の見解です。

**西野** 僕も、浅草の三社祭で大きなお神輿を担いでいたので、お話を聞いてそのところを話したくなってしまうですが、やめておきます（笑）。原風景で言う、僕なんかは浅草の路地裏でした。道の中でも、子ども道という、生活の表通りではない裏路地で、壁にチョークで落書きしたりして遊んだ、あの時の道と、夕ご飯時のまな板をたたく音と、焼き魚の匂いと、母ちゃんが「ご飯できたよ」と叫ぶ声と、それが懐かしい原風景としてよみがえってきたなと思って聞いていました。

## こどもゆめ横丁

**西野** 私はちよつと視点を変えて、伝統というよりは子どもたち自身が大人とつくり出していく新たな行事というあたりに光を当てて、子ども夢パークという所の話をします。

最初にもお話しましたが、川崎市で、子どもの権利条例を基に、子どもたちの居場所づくりを始めたんですね。2001年から始めて、工場跡地に土を入れて木を植えて作ってきたのが、「川崎市子ども夢パーク」という公設の場所なんです。2003年にオープンしました。この中に、プレーパーク（冒険遊び場）と、何らかの理由で学校に行きづらくなった不登校の子たちの集まる場所「フリースペースえん」というのが一緒にあります。プレーパークは「けがと弁当自分持ち」で、穴を掘ったり、たき火をしたり、工具を使ったりと、禁止されずにやってみることに挑

戦でできる遊び場です。

その中で、今日お話しさせていただくのは、子どもたちがつくっている、「こどもゆめ横丁」というイベントについてです。これは、子どもたちが自分たちで廃材を使ってお店を建設して、現金で商売をする、というお祭りで、夢パークができたときから大事にしてきました。


コロナウイルスの感染拡大で、子どもたちが楽しいことが何もなくなくなってしまった。子どもたちの自死まで増えていく中で、どうしてもこれだけはやりたい。こんな時期だからこそ、子どもの居場所を閉めてはいけないと川崎市に掛けあって、学校が休みだったときも夢パークを開け続けていた。それでも、イベントはやりにくいよね、と言われたんだけど、恒例のイベント「こどもゆめ横丁」をやりたいと子どもたちが立ち上がったんですよ。小学生のときからここに遊びに来てここで育った中高生たちが、あの祭りを止めちゃ

いけないよと、「横丁楽しくしよう会YTK」というのを立ち上げて、「スタッフから仕事を奪おう」を合言葉にして、「この祭りはこんな祭りだぜ」と保護者向けの説明会も開いた。

ゆめ横丁は小学生が主体のお祭りで、お店の建設が始まると大人は一切、手出し口出しできないんです。小学校1年生3人組も、廃材を使ってお店を作るんです。今、子育ての中で「危ないからやめなさい」「けがしたらどうするの」と禁止、禁止と言われちゃうけど、ここでは思いつきり、小さな失敗、けがをしながらも、むしろ、それを受け入れて乗り越えていく力を大事にしようと、工具も使う。小学校1年生の発想の中で、大人がやっていることを見よう見まねで、大変な思いをしながら建設していきます。



▲西野博之氏



大人が手を出せるところは、横丁の入り口とか両替所とかアルバイトセンターとか、公共施設だけです。コロナ禍の中で、感染対策をして、入場制限をしながら、このお祭りをやりました。22軒もお店が出たんです。輪投げ屋さん、ハッピー玉入れ屋さん、とかね。輪や玉を1個1個消毒するんです。雑貨屋さんみたいな小物を作って売る店もある。

小2、小3、小4の女の子3人組で出したラーメン屋さんは圧巻だったな。コロナ禍の中で不特定多数に食べ物を売っていいのか。大人たちが何もかも、禁止、中止に明け暮れた去年は、大学祭だつてみんな中止になっちゃったじゃない。なのに、このお祭り、小学生の子が食べ物を売ってるんだよ。ウインナー焼いたりホットケーキ焼いたり。あまりにもビックリで、テレビ朝日で、祭りの1か月後の12月に、感染がなかったという確認のもと、放送されました。子どもたちは一緒に

感染対策を考え続けましたね。食べ物から感染するんじゃないくて、飛沫が入ると感染する。だから、飛沫が飛ばないようにどう工夫して食べるか。食べ歩きをせずにどこで食べるか、みたいなことを徹底的に話しあいました。

それから落語屋さんもあった。大人たち顔負けの本当に面白い落語でした。

何だ？ このお店は、と思ったのは、ニコニコ拍手屋さん。大人を座らせて、「何て言ってほしい？ 何を褒めてほしい？」と言い、座った大人が「格好いいって言って」と言うよね。壁の向こうで、「お兄さん格好いい、格好いい、格好いい」と拍手を続けて、叫び続ける。「〇〇が素敵、帽子格好いいじゃん、顔もいいね」とか言って。1分30円、2分50円とかね。僕、最初こんな看板が出てきたときには、この商売はどうなのよと思ったけれど、実は大人に一番人気でした。子どもたちからこんなに褒められたことは人生の中でそ

うなかったと言って、相当喜んでいましたよ。


このお祭りには、アルバイトセンターというのがある、ここで育った子どもたちやボランティアのお兄ちゃんお姉ちゃん世代が切り盛りしました。祭り当日まで2週間かけて店を建設して当日を迎えた子どもたちはいいけれど、当日だけお客さんに来た子は、お客だけではつまらないから、アルバイトをして、「えん券」という券をもらう。アルバイトをしたお金でお店で1品ぐらい買えるという制度を、子どもたちが考え出したんですね。

お店の建設は2週間かけて子どもだけでやったけれど、解体は大人も参加して日没まで一気にやるんですよ。ガンガン釘を抜くような大変な解体作業。それもこのお祭りの醍醐味です。

このお祭りは、税金も集めました。儲けを計算して、儲けの1割を納税するというところまで、全部子どもたちと決めたんです。び

ツクリでしょう。このシステムも、一人でお金を儲けられたわけではなくて、みんなで横丁をつくったから儲かったんだから、税金を集めよう、と。1万8千円ぐらいだったかな、この時集めた税金が。

それで何をやったかという、遊具を作るんです。それで買える材木を買って、足りないとところは廃材を利用して。小学校からこの横丁で育った、今は高校生になる女の子が、コンパネの裏を均等に電動工具で切っていつて折り曲げて、90度滑り台をスタッフと一緒に作りました。すごくないですか。子どもってすごい力をもっている。面白いのは、今その子は宮大工を目指していて、この間、佐渡まで行ってきた。そして、今度また別の大工さんのところで修行することになりそうだと聞いています。こうやって、行事を通して、自分の夢も暮らしも手に入れていく。面白いお祭りでしょう。



このお祭りが始まるきっかけがあつて。夢パークができた頃のイベントで、大人が店を出したんだよね。子どもたち、おなかがよくだろうからといって、焼きそば屋さんとかをやった。そしたら、子どもが「ずるいじゃん。なんで大人だけ商売できるわけ？俺たちもやりたい」と言っただよね。子どもたちがお店をやるのも面白いかもね、子ども商店街をやってみようか、というのが、このお祭りなんです。まさにそんなことがきっかけになって、新たな行事、文化をつくり出していく。

ここで育った子どもたちが、大人になって親になって子どもを生んで、この近所に引越してきているんですよ。まさにここがひとつの原風景になって、子育てをするなら俺がガキの頃に遊んだあの近くで子育てしたい、と言っこの周りに集まってきたから、地元の小学校が1クラス増えたんですね、少子化のこの時代の中で。

このお祭りは11月で、今年もなんとかやるやり方を考えて、続けようと思っています。子どもたちと話しあつて。

### 時間・空間の共有と、憧れ

**加藤** 西野さんのお話にあつたように、子どもたちが、大人がしていることに魅力を感じ、ワクワクドキドキしながらまねしていくことは大事なことで、大人は意外と、子ども時代に大人のすることに憧れてまねする中で感じていたワクワクドキドキを忘れがちだと思うんです。柳田国男は『こども風土記』の中で、昔の大人は子どもたちに隠し事をしなかった。やがて子どもたちが自分たちがしていることを同じようにするようになるので、何も隠し事をしないで見せていた。そこで子どもたちは自然に大人がしていることを身につけていった、ということを書いています。そういった意味での時間と空間の共有が今の時代、失

われつつある。これは、学校とか幼稚園とか保育園とか、近代教育が発達した中で見落とされてしまったことではないかと思っています。学校教育はとても大事で、否定されるものではないんですけれども、そこで大人と子どもの時間、空間を完全に断ち切ってしまうことが果たして良いことなのかどうかを、あらためて見直さなければならぬと思います。

そういう意味では、夢パークの話の中で出てきたような、子どもたちに「ずるいじゃん、自分たちもやってみたい」と思わせるような大人の姿が実は大事なんじゃないかなと思います。そういった大人の姿があれば、子どもたちはそこに魅力と憧れを感じて、自分たちもやってみたい、自分たちも参加したいと思うようになっていくので、そういった大人の姿を取り戻すことが、実は子どもの生き生きとした姿をよみがえらせる、まずは第一歩ではないかと思います。

子どもは西野さんがおっしゃったように、すごい力をもっているんですね。大人が想像もしていないようなすごいことがたくさんできて。だけど、これはしちゃダメ、あれはしちゃダメと、子どもの力を大人たちが抑制してしまうから、子どもたちが力を発揮する機会とか場をいつの間にか奪っていつていた。大人たちが自分たちの姿を見せることをもう一度やっていくが必要かなと思います。いつも学生にも言うのですが、幼稚園とか保育園は、そういう時間、空間を提供できる場所だと思っています。大人たち、特に近所近隣の大人たちに参加してもらって、大人たちが何かを楽しんでいる姿を子どもたちが巻きながら見ていて、いつの間にかそこに子どもが参加するような時間、空間というのは、幼稚園や保育園だったらくらうと思えばつくれるのではないかという気がするのです。そういった取り組みを意図的に意識的につく

ることが必要なと思ったりもしています。

**西野** 学校が、子どもたちを地域のおっちゃんおばちゃん、じいちゃんばあちゃんの暮らしから切り離して勉強する場になっていったあたりに、子どもたちの生きづらさも生み出されてきたのではないかなと思います。教育という子どもの学びと育ちは、学校の中だけでなく、その学校を外れた地域社会の中で多様に、障害のある人もない人も、高齢の人も、いろいろな人のいる中で育ちあう空間、人間関係が大事なんだよなと感じているんですね。社会教育の視点をもつと言いますか。

僕らのやっている夢パークの中に、「フリースペースえん」という、不登校の子たちが通ってくる場所があつて、そこで大事にしているのは、毎日お昼ごはんを作って食べるということなんですよ。毎日お昼ごはんを作るという日常を、大人たちと共にする。小学校1年生から上は70代ぐらいまでの人が一緒に

過ごしているわけです。そこで伝承される暮らしの知恵——芋のつるの部分を使ってくるがないよとか、大根の葉だって炒めて食べたらいよいよとか。年代の高い人のもっているそういった知恵を若い子たちが拒絶するかと思えば、そうではなくすごく喜ぶのね。ジャンクフードで育ったはずの子どもたちが「これうまい」とか言う。暮らしをどう取り戻していくかということは、子どもが元気になる大きなポイントになると思っています。

夢パークという場所には格好いい大人がたくさんいるんですよ。夢パークの遊具は、すべて手作りなんです。ど素人のスタッフとど素人の子どもで年間9万人の人が遊びに来る遊具を作っているんです。プロの大工を使わないんです。でも教えてくれる格好いいおっちゃん元大工の棟梁だったりするわけですよ。そうすると、憧れですよ。このおっ

ちゃんがこんなふうに設計図を描いて、こんなふうにして作るんだ。こうやって平衡を取るんだとか、斜めに木を入れないと倒れちゃうんだとか、そういうことを、格好いい大人に出会って伝えられていく。それがこの祭りの背景にある。子どもが日常的に、憧れになるような大人と出会って、遊具を作ったりお祭りをつくり出したりしていく。大人と子どもとの出会いが十分にあって、大人と子どもたちが時間と空間を共有している、ということからエネルギーが生み出される。そういうことをすごく感じています。


### 子どもの驚きや喜びの「ミニ・ティー」

**松延** 西野先生と加藤先生のお話を合わせて聞かせていただいて、あらためて思ったことがあります。ここ数年で、乳幼児の教育や保育の大切さが語られ、保育者の専門性といったこともすごく語られるようになってきてい

ます。ただ、子どもたちを本当に育てていくうと思ったときに、園の建物の中だけ、敷地の中だけではどうしても完結できない。コロナの状況があるにせよ、防犯の考え方があるにせよ、それぞれの置かれている場所を取り巻くコミュニティ、地域や社会が必ず存在している。だからこそ風通しを良くする、門を開けておくという心意気をもっていないと、決して子どもを育てていけると言い切れないのではないかなと思っています。園の中だけで保育を終わらせるのではなくて、地域の人とも出会っていけるような保育の計画というのか、営みをやっているという話をここ数年、先生たちとよくしています。

僕も、子どもたちの周りにいる大人の存在が面白いなと感じています。朝や夕方の送迎のときは〇〇君のお父さん、お母さんなんだけれども、日中は役場のジャケツトを羽織って町で働いている人。園の保護者なんだけれ





ども町の人、という人がたくさんいる。さらにおじいちゃんおばあちゃんたちは田んぼをやっていたり畑をやっていたり。卒園児のお父さんお母さんが近くでお店をやっていたりする。直接子どもにかかわっている人たちだけではなく、子どもたちとわれわれが、外もフィールドとして捉えて一緒に生活していく、あるいは一緒に遊んでいくという思いでやっていくことが、子どもたちの地域や原風景の一端をつくっているのだろうなと思う。自分たちだけが子どもを育てているんだと思って肩に力が入り過ぎてしまうのではなくて、どんな声を掛けてつながりをつくっていく。地域の面白さをみんなで面白がっていくことで、これからもっともっと、僕の園でも面白いことができるのではないかと考えさせていたっていました。

**加藤** 今回お二人がお話しされたお祭りのように、大人のやっていることに憧れをもつて、

子どもも時間、空間を共有するものであると、子どもたちは大人の文化を自分たちの文化にできるんですね。憧れはそのためのとても大事な要素になるので、そこを大人が見失わず、憧れになるような存在であることが大事です。そのためには大人自身が心から楽しむことが、何よりも大事だと思います。

西野さんに見せていただいた写真に、西野さんが子どもと一緒に泥だらけになっているのがありましたけれども、あれがまさに大事なところなんだと思います。ああいう大人がそばにすることが大事。大人は、子どもの教育のために何をすればいいのか、お祭りを子どもの教育に生かすにはどうしたらいいのか、という発想に陥りがちなんですけれども、そうではなくて、大人が心から楽しみ、子どももそれを見て、憧れをもち、一緒にやりたいと思う。そこで大人が、子どもたちを教育しようとか何かを獲得させようとか思わずに、

驚きや喜びを大事にしながら、ワクワクドキドキを大事にしながら一緒にいる。

近代以降の大人はつい、子どもを目の前にしたら、子どもを教育しなくては、保護しなくてはと思ってしまう。その気持ちを大人は抑制しなくてはいけない。子どもに与える文化や、子どもの行動を、向上的な発達にとつて有用であることを優先し、子どもと一緒にワクワクドキドキする時間、空間を共有できるか、ということが実は今、問われているのだろうと思います。お祭りのような中でも、大人が子どもを教育しなくては、教育にとつてどれだけ有用かを考えてしまうことを抑制しながら子どもと向きあう、ということが実は大事なのではと感じました。

**西野** ゆめ横丁の祭りでも、手出し口出ししたがる大人がたくさんいてね。大人が良かれと思って口出しすると、子どもは萎えてしまって、面白さがどんどん消えていく。だから、

ある部分は大人がぐっと我慢して、お店のつくりが格好悪かったり、儲けが出なかったり、失敗するかもしれないけれど、大人が余計な手出し口出ししなければ、子どもは生き生きとやり遂げ、元気になっていく。教える、指導するという目線よりも、あのお兄さん格好いいな、あの大人みたいに格好いい大人になりたい、というところが、子どもが育っていくうえですごく大事な部分だったなと、今日對話しながらあらためて感じました。

**菊地** まだまだお話が尽きませんが、ここで締めさせていただきます。どこかで続きができたらし思います。今日は本当にありがとうございました。



▲菊地知子氏

(2021年4月14日 Zoomにて開催)